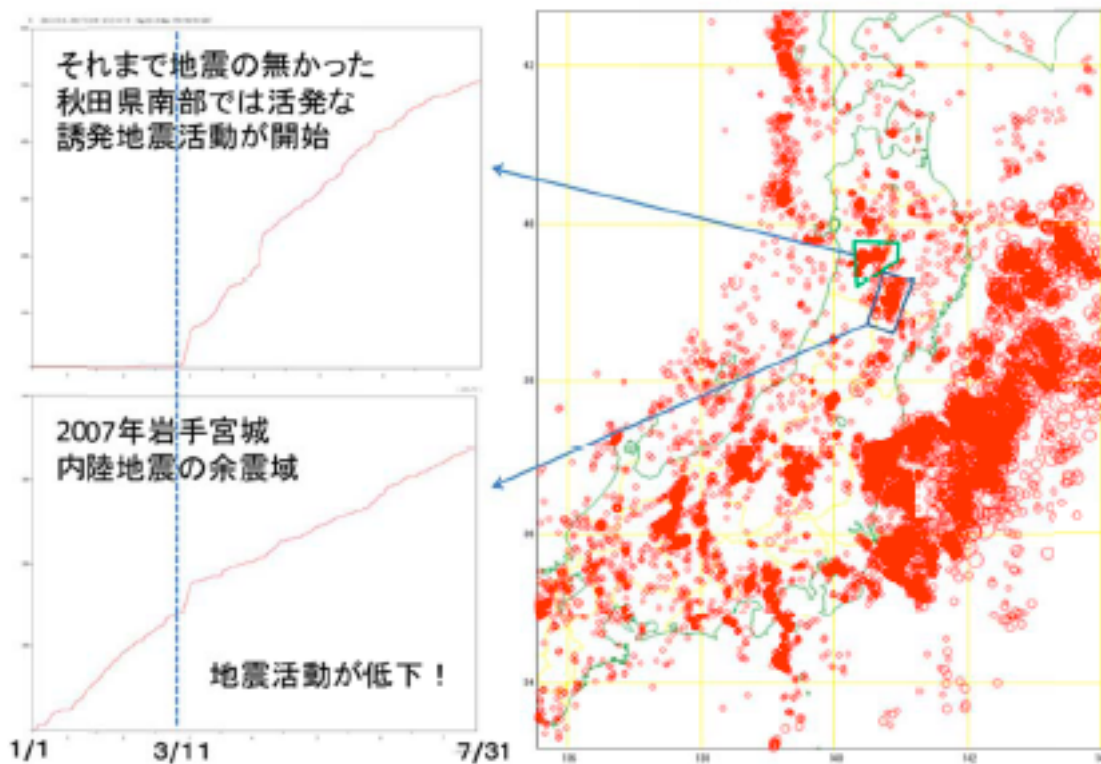


最近の地震活動 (3/11以降 地震活動の評価が困難に)

3月11日以降、日本列島全体の地殻の状態が大きく擾乱され、過去の経験則が当てはまらなくなっています。特に東北地方から関東地方は顕著で、3月11日以前と以後で、地震活動のパターンが大きく変わってしまいました。下の図がその代表的な例です。

1月1日から7月31日までの地震の積算数

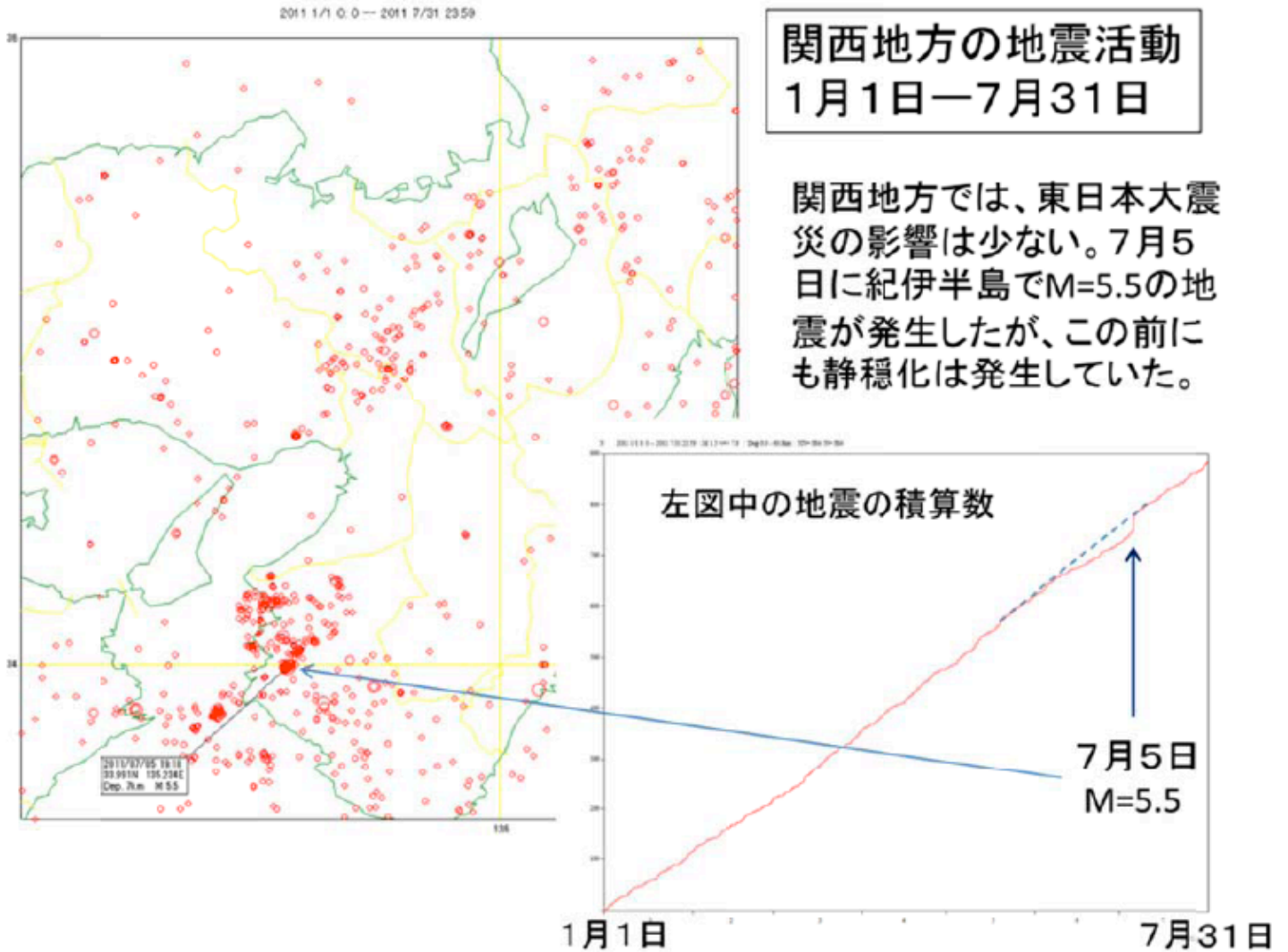


今回の地震では、東北地方や関東地方の内陸まで大きな影響が加わりましたが、たとえば3月11日以前はほとんど地震活動の無かった秋田県南部で活発な地震活動が開始しました。またそれとは逆に、2007年の岩手宮城内陸地震(M7.2)の余震域では図の積算曲線の傾きが3月11日を境として大きく変わって、地震活動が圧倒的に低下しています。

東北地方ではこのような狭い地域での地震活動の活性化/静穏化というものが、モザイク状に観測されており、地震活動の評価が非常に難しい状況となっています。

まだまだ大規模余震・誘発地震の可能性は高く、十分警戒が必要な状況です。

また関西地方の状況ですが、こちらは3月11日の東日本大震災の影響はあまり受けておりません。7月5日には紀伊半島でM5.5の比較的規模の大きな地震が発生しましたが、右下の積算図曲線でもわかるように前兆的な地震活動の低下現象を確認することができます。



問題は中部地方で、現在地震活動の評価作業を継続中です。全体として地震活動が上昇しており

東海大学 地震予知研究センター長 長尾年恭 教授